

はじめに

ぼくにとって新日本プロレスの珠玉の名勝負の数々はまぎれもなく

「真剣勝負」です。

これは今もちろん変わりません。

1976年6月26日。

ぼくは、8歳になつてわずか6日目、小学2年生でした。

「世紀の一戦」と今も語り継がれている「猪木・アリ戦」が行われた日です。

力道山時代、日本のプロレスの創成期から熱狂的なプロレスファンであった父の膝の上で、ぼくは心臓が口から飛び出るのではないだろうかと思うほどの緊張で、決戦開始のゴングを聞きました。

「猪木さん勝てるよね、勝てるよね」と何度も尋ねるぼくに父は、一切応えることなく、「これが、『真

『剣勝負』や。よく観ておけよ」とだけ語りかけました。

あつという間の15R終了。

父は、大きいため息をつき、テレビ画面に映る二人の選手に賞賛の拍手を送っていました。

丁度、両者が健闘を称え合い、抱き合うシーンが映し出されていたときに、父がぼくに語ってくれたメッセージが、今のぼくの『はたらく』の大きな礎となっています。

父は、8歳のぼくにゆっくりと語りかけてくれました。

「これがなあ、一つの分野を極めた『超一流』同士の『真剣勝負』や。猪木もアリもほんまに凄い。月曜日（試合は土曜日）、学校に行ったらこの試合のことをいろいろと言う奴がいるかもしれない。でも、そんなもんはほっとけ。この試合は、どんな仕事に就いても『真剣勝負』を挑んどるもんにだけは、どんだけ凄い戦いか絶対にわかる。

それとなあ、お前が大人になったとき、この試合が必ず見直されるときがくる。

映像でこの試合を改めて観たとき、いかに二人が凄い戦いをしたのかわかる人間になつとくんやぞ。そのためには、どんな仕事でもかまへんから一生懸命働いて『真剣勝負』できるようになつとくんやぞ。そしたら『超一流』がわかるようになってから。とにかく『はたらく』ことなんや」父の眼差しは真剣そのものでした。

月曜日、父が話してくれた通り、学校ではあごをしゃくらせながら教室の床に寝転んでキックをする

真似をふざけながらしている男子が何人もいました。前日の試合で猪木選手がとった戦法を明らかに茶化したものでした。

父の論もあつたので、ぼくはなんとも思いませんでした。この二人の戦いは、その後も長らく「世紀の凡戦」と酷評され続けたのでした。

あれから時が経ち、父が予言した通り、今となつてあの試合がいかに壮絶なものであつたかと思ひ直され、多くの関連書籍も出版されるまでになりました。

更に3年前には、DVDの発売も解禁になり大きな反響を起こしています。

改めて映像をノーカットで観たとき、丁度ぼくの年齢は当時の父と全く同じでした。

そのときぼくの隣には、満面の笑みの父の遺影が15R一緒にいてくれました。

ぼくは、涙が止まりませんでした。終了のゴングが鳴り、ぼくはハッキリとわかりました。この二人の選手は『超一流』である、と。そしてこの一戦は紛れもなく『真剣勝負』であつた、と。

ぼくの涙の理由は、当時の父と同じ年齢になったとき、父がぼくに語ってくれたことが理解できたからこそのものでした。

今からぼくは、ぼくの『はたらく』を書き始めます。

『真剣勝負』がわかるようにはなりませんが、ぼくは現在、何かの分野の『超一流』には全くなれていません。まして、ビジネスマンとして父には遠く及びません。

ぼくの父は15歳で終戦を迎え、当時の男子では珍しい薬科大学に進学し、薬剤師となり81歳で亡くなる直前まで、企業勤務者として製薬業界で生涯を全うしたモーレッツサラリーマンでした。大きな出世をして高い役職に就いたわけではありませんが、圧倒的に優れたビジネスマンであつたと思います。

その父の背中に習い、ぼくも懸命に『はたらく』を実践してきました。決して高い能力や誇らしい実績があるわけではないにもかかわらず、なぜこのぼくが、ぼくの『はたらく』を書き記すのか。

答えは、たった一つ。「危機感」です。

ぼくが大切にしてきた『はたらく』が、現在の日本では余り大切なものではなくなってしまうのではないだろうか。この『はたらく』は、懸命に取り組まなくても許されるものに成り下がっている風潮が蔓延しているのではないか。

ぼくは、『はたらく』に憧れ、支えられ、助けられ、やっとこさ50歳になりました。

だからぼくの師匠であり、大恩人であり、大親友でもある大切な『はたらく』を書き始めます。